

裁きの家

三浦綾子



の家

三浦綾子



裁きの家

九七〇年五月二十五日 初版発行
九七六年十一月三十日 二十九版発行

著者 三浦 綾子

装幀者 小松 久子

発行者 堀内 末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五—一〇

郵便番号 一〇一

電話 出版部(03)二三〇一六三六一

販売部(03)二三〇一六七—

印刷所 大文堂印刷株式会社

錦印刷株式会社

著者との了解により換印を
廃止します。

定価 六五〇円

乱丁・落丁本はお取替えいたします。
0093-771058-3041

© 1970

裁
き
の
家

受話器を置いた優子は、白い顔を窓に向けて、呆然と突っ立っていた。涼しい目もとが、暗くかげついている。

水色のレースのカーテンを透かして、真夏の日を弾き返す大通り公園の芝生が見える。この大通り公園は、札幌の中央を、縦千二百メートル、横六十五メートル程の緑地である。四季とりどりの花壇、大小幾つかの噴水、乙女の裸像、テレビ塔、そして美しい並木や木立ちがあって、市民や観光客の憩いの場となっていた。

この公園が西に果てる所に、札幌高等裁判所の、がっしりとした灰色の石造建築が、立ちはだかるように建っており、優子の家は、この裁判所の斜め向いにあつた。

優子は、いま聞いた滝江からの電話を、胸の中で反すうしていた。滝江は夫の小田島謙介の嫂で、優子より四歳年上の四十歳だった。

「ねえ、いいこと。優子さん、こんどは優子さんが、おかあさんを預ってくださいるのよ。もともと、あなたとおかあさんは、仲がいいんですもの。あなただつてうれしいでしょ。お願いしたわよ。いいこと」

滝江の声はいつものように華やかだったが、決して否とは言わせぬ強さがあつた。

「もともとおかあさんとあなたは、仲がいいんですもの」

と言つた時、滝江はふくみ笑いを洩らした。滝江の、ぬれたような黒い瞳と、やや厚めの肉感的な

唇が、皮肉に笑っているのを、優子は目の前に見たような気がした。その笑いが何を意味しているのか、優子には痛いほどよくわかった。

優子は去年の秋、家を新築した友人に招かれて宮ノ森に行った。札幌神社の裏手の山腹一帯の「宮ノ森」は、この頃急速にひらけた高級住宅地である。山小屋ふうに、白樺の丸木を使った家や、軒先が垂直に地に届く、赤い屋根の家など、モダンな家が多かった。

その帰り、優子は夕焼空を眺めながら、落葉松の生垣に囲まれた、小粋な料亭ふうの旅館の前を通りかかった。見るともなく、その玄関先を見た時、優子はハッととして、思わず生垣の陰に身をひそめた。玄関の明るい灯の下に、嫂の滝江が、若い男と二人で出て来たのを見たのだった。滝江は大胆にも、男の腕に軽く手をかけていた。

その夜、ためらいながらも、優子はやはり、夫の謙介にそれを告げずにはいらなかった。「なるほどな、あのおねえさんなら、ありそうなことだね」

謙介はあまり驚いたふうもなく、ぼつりと言った。その一言に、優子はふとかすかな不安を感じた。

「あなた……」

「なんだ」

「いいえ」

優子は言いかけた言葉をのみこんだ。

夫の謙介は、平凡な、まじめな、いくぶん人がいいだけの商社マンだと思っていた。その夫が、いつのまに自分以上に滝江の生き方を見ぬいていたのだろう。いや、見ぬくというより、知らぬまに見

つめていたような、そんなこだわりを優子は感じた。

それから一週間もたった頃だったろうか。滝江から優子に電話があった。新しくできたハンドバッグを見てほしいというのである。滝江は、ハンドバッグや袋物のデザイナーで製作もしていた。丸帯の布地、しぼり、かすり、皮など、材料はいろいろだったが、滝江のデザインは斬新で、デパートからの注文が絶えなかった。その収入は、大学教授の夫博史の収入を上まわっていた。

優子はいつも、呼ばれば訪ねて行った。姑のクメが滝江と同居しているからだ。行くのが礼儀だと、優子はそれをふしぎに思わなかった。だがその日は、さすがに行く気がしなかった。宮ノ森の旅館から出た滝江の姿が目に見え、足がすくむような気がした。

二

藻岩山の陰の、滝江の家に出かけて行くと、滝江は機嫌のいい顔で、優子を部屋に通した。いつもよりすべすべとした白い滝江の肌を、優子は複雑な思いで見た。

「おかあさん、優子さんですわ。さ、何でも、お気のすむまでおききくださいよ」

優子は何事かと、身を固くした。姑のクメは、しわの深い額に、いっそうしわをよせて、見すえるように優子をみた。

「優子さん、謙介からきいた話、あれは本当ですか」

クメは挨拶もそこそこに、まだ立っている優子に言った。優子は不安になって、滝江をちらっと見た。滝江は悠然と微笑を浮かべて、優子に椅子をすすめた。

「あの……お話って、どんな……」

「滝江さんが、ほら、宮ノ森の旅館から、男と二人で出て来たとか、どうかって。本当ですか優子さん？」

「まあ」

一瞬優子はハッと息をのんだ。そしてつぎの瞬間狼狽した。あれは夫婦二人だけの話ではなかったか。妻の自分に相談もなく、母に電話をかけたらしい謙介に、優子は憤りを感じた。

「ほらごらんなさい、おかあさん。優子さんだって、驚くわね。ね、優子さん、大笑いじゃない。四十にもなるわたしに、お相手してくれる男がいるとでも、思っていらっしゃるらしいのよ、おかあさん」

「……………」

滝江は、くつきりした二重瞼の目を、いっそう大きく見ひらきながら、優子の顔をのぞきこむようにした。そのあまりにも悪びれないまなざしは、優子に一瞬、あれは自分の錯覚ではなかったかと思わせたほどだった。

「わたし……」

優子は思わず顔を伏せた。

「優子さん、謙介はね、あなたから聞いたって言ったんですよ。謙介に言ったことを、そのままここで、おっしゃいよ」

「おかあさん、そんなにガミガミおっしゃっちゃダメよ。優子さん、心配しないでね。わたし何も、あなたを責めてるんじゃないのよ。わたし、優子さんを信じていますもの。優子さんは、見ないもの

を見たなんて、とてもいえない人ですもの」

「じゃ、滝江さん、何ですか。それじゃまるで、謙介がでたらめでも言ってきたというんですか」

「いやあね、おかあさんたら。もう少し冷静にお話ししましょうよ。優子さんは、見ないものを見たなっておっしゃらないわ。ただね、人間誰しも見まちがいはあると思うの。それにね、おかあさん、世の中には案外似た人っているわよ。優子さんはわたしだと思いちがいをしたかも知れないのよ。わたしだと思ったら、そりゃあびつくりするわ。それにご夫婦ですもの、謙介さんに言ったって、無理もないと思うわ。わたしだって、もし優子さんが、ほかの男の人と、宿から出て来たら、きっと博史にいうと思うわ」

滝江はクメに気づかれぬように、軽く優子にウインクを送って、言葉をつづけた。

「でもね、おかあさん。問題はそれからよ。おかあさんがわたしに、こんなことを聞いたと、謙介さんの電話を教えてくださったのは、それはよろしいのよ。わたしが申しあげたいのは、おかあさんがわたしを信用してくださらなかったことなの。ね、優子さん、聞いてくださいいね」

とまどっている優子に、滝江は微笑した。

「あの日わたし、車がパンクしていたものだから、そのままハイヤーで出かけたのよ。いつものようにデパートに品物を納めて、それから狸小路の袋物の店のぞいて歩いたのよ。そして、美容室に行つて、シャンプーをして、パーマをかけて帰って来たの。二時から六時までの間に、宮ノ森まで浮気しに行くなんて、そんなしやれた真似のできる時間があるかしら」

「そうね、パーマは時間を取りますし……」

優子はやっと口をひらいた。

「いえね、滝江さん、わたしだって、そりゃあ信じたくありませんよ。でも優子さんが見たっていうんだから……」

「そう、おかあさん、つまり優子さんの言葉なら信用できるっておっしゃるのね」

「いいえ、そんなことはありませんよ。公平ですよわたしは」

「いいえ、そうよ。おかあさん、わたしと毎日一緒にいらして、いったいわたしをどう思っているのかしら。わたしね、たとえ時間があまったら、博史を裏切って浮気などしませんわ。好きな人ができたら、わたし博史ときっぱり別れます。わたしの気性で、こそこそ男と遊ぶなんて、できっこありませんわ」

「じゃ、優子さん、あなたはいったい、何と謙介に言ったんです？」

クメは不機嫌な顔を優子に向けた。だが滝江は、優子に口をひらかせなかった。

「おかあさん、わたしは優子さんのことは、どうでもいいの。わたし、おかあさんのことをとても大事に思っているのよ。だから、おかあさんも、わたしを大事に思ってくださいとばかり思っていたの。たとえ世界中の人が、わたしを何と言っても、おかあさんだけは信じていてくださるって、わたし本気でそう思っていたのよ。でも優子さん、おかあさんたらね。優子さんを呼びなさい。優子さんを呼びなさいって、きかないのよ。ね、優子さん、嫁って、損な立場ねえ。息子の言葉は、一も二もなくなっとくなさるけれど、まるでわたし、罪人扱いよ。わたし、今度初めて、ああわたしは、嫁なんだなあ、おかあさんのおなかを痛めた娘じゃないんだなあって、つくづくわかったわ」

「ごめんなさい、わたしがそそかしいものですから。でも、あの紺のスーツをみて、わたし、てっきりおねえさんだと思っちゃったのよ」

「紺のスーツ？」

「ええ」

「ほらごらんなさい、おかあさん。あの日わたし、和服でしたわね」

その通りだった。優子がみたのは、和服姿の滝江だったのだ。

クメは不機嫌な顔をいつそう不機嫌にして、

「優子さん、言葉に気をつけてくださいよ。人騒がせにもほどがありますよ」と、強くたしなめた。

帰り際に、皮製のハンドバッグを、滝江は優子にくれた。そのバッグを優子は惨めな思いで抱えて家に帰った。

そんなことがあって以来、クメと滝江の仲は、何となく気まじくなり、クメは時々胃を悪くするようになった。やがて胃潰瘍と診断された。今年の春ついに入院したが、どうやら四カ月の入院生活で恢復し、後二、三日で、退院するといふのである。

そのクメを、滝江は、優子の家に引きとれと、電話をかけて来たのだった。

三

夕食を終えた謙介は兄の博史に電話をかけて在宅を確かめ、家を出た。

夕ぐれの公園の芝生を、少女が男の子のようなジーパンをはいて、犬に引きずられるように駆けて行った。円柱のようなものが、勢いよく駆けて行くのを、謙介はちょっと立ちどまって見送っ

た。

謙介はタクシーをひろいかけたが、思いなおしてバス停の方に歩いて行った。バスに揺られて二十分あまり、謙介はようやく中の沢に着いた。

(いやな役目だな)

謙介は重い心をふり払うように、たそがれの藻岩山を見上げた。頂きの展望台には、水銀灯が青い灯を点している。

だから坂を謙介はゆっくりと歩いて行った。十年程前から住宅が建ち始めたこのあたりは、沢や小山のある緑の多い変化に富んだ地形だった。

(全く厄介なことだ)

今日謙介が勤めから戻ると、優子は直ちにクメの退院を告げた。

「ほう、それはよかったな」

と言った謙介の言葉を、優子はとがめるように言った。

「そりゃようございますよ。でもね、あなた、おかあさんをわたしたちがひきとらなくちゃいけないのよ？」

「ひきとる？ ひきとるって、お前……」

「おねえさんが、わたしたちにお願いますって」

「冗談じゃない。寝る所がないじゃないか」

謙介はあわてた。階下はリビングキッチン、夫婦の寝室、謙介の書斎の三間。二階は修一と弘二の部屋の二間だった。それにくらべると、兄の家は、階下に十二畳のリビングキッチンと、十畳と八畳

の和室があり、更に最近建て増した八畳の離れがあった。二階には博史の豪華な書齋、一人息子の清彦の部屋、そのほかにもう一部屋あった。

謙介の次男の弘二も、祖母の同居を猛然と反対した。

「ごめんだよ、ね、おとうさん。お婆あちゃんてのはね。たまに来て小遣いでもくれるからいいんだよ。べったりそばにいて、あれこれ文句をいわれたら、かなわないよ」

「まったくそのとおりだ」

謙介は簡単にあいづちを打った。

「第一さ、財政がちがうよ、藻岩のおじさんとうちとは。おとうさんの月給がいくらだか知らないけどさ、毎日おかあさんから、百円札何枚しかもらうことできないサラリーマンじゃ、てんで無理じゃないの」

優子は黙って、エプロンの端を丸めていた。それまで黙っていた修一が言った。

「でもね、おかあさん、もし自分の子供が帰ってくるんなら、どうするのさ。部屋が足りないも何もないでしょ。来てもらうといいよ」

「ごめんだよ、にいさん。ぼくはね、来年高校に入れるかどうかの瀬戸際だよ。家族はなるべく少ないほうが、勉強にいいよ」

結局謙介が、博史たちに相談に行くことに決まったのだった。

「さあ、どうぞどうぞ。お待ちしてましたわ、謙介さん」

ブルーのワンピースを着た滝江は、豊満な腕を肩から出して、愛想よく謙介を迎え、十畳の和室に通した。

「にぃさんは？」

家の中がひっそりとして、裏の小川の流れが妙に大きくひびいていた。

「ごめんなさい。いまね、何だか大学のほうでゴタゴタしてるのよ。たったいま呼び出しが来て、車で出て行ったわ」

謙介は肩すかしを食ったような気がした。

「清彦は？」

「珍らしいの。一週間程前から根室よ」

滝江は、ウイスキーを出して、謙介の前においた。

「いや、今日はごちそうになりに来たんじゃあないんでね……。弱ったな……。実はおふくろのことなんだがね、おねえさん」

言いかけた謙介の唇に、滝江の人さし指が柔らかく押し当てられた。

「わかってるの。まあ黙ってウイスキーを召しあがれよ」

滝江は艶然と笑って、謙介に押しあてた指を、自分の唇にあてた。謙介は川の音が、一瞬とまったような思いがした。

滝江は扇風機のスイッチを入れながら言った。

「いやね、謙介さんたら。そんなこわい顔をして」

いわれて謙介は、ちょっと苦笑した。そうか、自分はいま恐ろしい顔をしていたのか。相手に異性を感じた時、自分は恐ろしい顔をするのかと、謙介は首をなでた。いま、唇に押し当てられた、滝江の指の柔らかい触感がなまなまと残っている。

「おねえさん、帰ります」

謙介は立ちあがった。

「あら、もうお帰り？　じきに博史が帰るわ。一時間ぐらい待っててくれって言っていましたわ」

謙介は再び腰をおろした。優子や息子たちの手前、このままのめめと帰るわけにもいかない。

「召しあがれよ。水割りになさる」

滝江は畳の上に横ずわりになった。白い足だった。謙介は目をそらした。

「静かな夜だなあ」

「でしよう。この世に、まるで謙介さんとわたしの二人っきりみたいね」

「どうしてこんな淋しい所に家を建てたんです？」

このあたりは、いま萩の花が盛りである。二、三年前、近くの藻岩山に熊が出たとさわいだことがあった。

「そうかしら、淋しいかしら。けっこう車は通るし、離ればなれでも、家はたくさん建ってるじゃないの」

「そりゃそうだけど……」

「わたしね、自分の家の庭を、小川が流れているという地形が気に入ったのよ。ほんのひとまたぎの小川だけど、水がとてもきれいでしょ。わたしね、昔から小川の流れる庭が欲しいと思いつづけて来たのよ。だけど、人間の理想って、こんなことでいいのかしらって、ときどき思うわ」

謙介はおやと思った。滝江は現実的なのだけの人間のように思っていた。

原野だったとはいえ、六百坪もの土地をいち早く手に入れたのは滝江だった。そして、がっちりと

した立派な家を経て、大型のカーを買った。謙介は半ば羨ましく、半ば驚嘆していた。この滝江から、いまのような言葉を聞こうとは、謙介は思ってもみなかった。クメのことを言い出す潮時だと謙介は思った。

「なるほどね。おねえさん、なかなかいいことをいうね。全く人間の理想なんて、どんな家に住みたいとか、貯金をいくらにしたいとか、月給がいくらになったらいいとか、考えてみると、みみっちいような気がするな」

「そうよ。わたしとときどき、むなしいなって思うわ」

人のいい謙介は、滝江のかくされた一面を見たような気がした。謙介は、一口ウイスキーを口にかけてから言った。

「ところで、おねえさん、おふくろのことなんですけどねえ……」

いいかけた時、滝江はさりげなく、謙介のバンドに目をやった。

「まあ、珍しい皮ね。とてもいい色だわ」

うす紫の皮だった。謙介が友人からもらったものである。

「安物ですよ。くれた奴が奴だから」

「そう？ でも、安くてもちよっと珍しいわ。和服用のハンドバッグに使うといいんじゃない？ 何の皮かしらね」

滝江はひざをにじって、目をバンドに近づけた。謙介のズボンに、滝江のすべすべとした白い顔がふれた。思わず謙介はあどすさった。

「ま、意地悪ね、ちよっとよく見せてよ」